

社会福祉施設長の HIV 陽性者の受入れ戦略 福祉施設長のインタビューの分析を通して

社会福祉法人武蔵野会 山内 哲也 (7227)

キーワード：HIV/AIDS、福祉施設長、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. 研究目的

HIV 感染症の治療は飛躍的に進歩し、抗 HIV 薬の多剤併用療法によって現在では慢性疾患となり、在宅生活をおくる者も多くなった。その反面、HIV 陽性者が高齢化して、認知症や脳梗塞などを発症し、在宅生活が継続困難になる事例や急性期医療から慢性期医療への移行に伴い、病院内の長期療養者が漸増する状況が生じている。HIV は非常に弱いウイルスであり、福祉施設の利用も十分可能である。そうした中、地域社会の受け皿として福祉施設の役割期待が高まっているが、HIV 陽性者の受入れには困難が伴うのが実情である。その背景に HIV/AIDS に対する基本的な知識不足、受入れ体制の未整備、差別・偏見が指摘¹⁾され、著しい受け入れ困難感が存在している。

本研究は、HIV 陽性者の受け入れ実績のある福祉施設の施設長にインタビューを行い、どのような意思決定と組織戦略を発揮して、HIV 陽性者の受入れを行ったのかを調査し、施設長の HIV 陽性者の受け入れにおける意思決定と組織戦略のプロセスをあきらかにする。

2. 研究の視点および方法

HIV 陽性者の受け入れを行った福祉施設の施設長 8 名を対象に、2011 年 1 月-2013 年 2 月の期間に、1 回 100-120 分程度の半構造式面接を行い、HIV 陽性者の受け入れを施設長はどのような意思決定を行い、組織改善を行ったのか、その体験を語ってもらい、その語りを IC レコーダに録音し、逐語記録にしたデータを分析した。

分析は、施設長の HIV 陽性者の受け入れに関する意思決定と組織戦略のプロセスに焦点を当て、木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。

3. 倫理的配慮

研究参加者とその所属する福祉施設の不利益にならないよう配慮し、研究目的と方法、自由意志による研究参加、途中中断の自由、研究結果の公開、プライバシー保護と個人情報保護の手続きについて口頭と文書で説明し、同意を得て実施した。また、調査について所属する法人の倫理審査を経て実施した。

4. 研究結果

分析の結果、9つのカテゴリーと7のサブカテゴリー、36の概念が抽出された。全体のストーリーは、以下のとおりである。【 】は、カテゴリー、「 」は概念である。

施設長は、リーダーシップを発揮し、組織内外の社会資源を活用しながら、組織改善を図り、HIV 陽性者の福祉施設の受け入れを促進していた。施設長は感染不安に対する組織的

不安や動揺に対して、組織理念を軸にして様々な組織改善の方略を発揮していくとともに、福祉施設の専門的機能に引き寄せ、HIV感染者という医療モデルから生活主体者という福祉モデルに転換していくことを目指していた。

まず施設長は、HIV陽性者の受入に躊躇し、著しい受け入れ困難感を示す現場に対し、【組織の動揺を受け止める】ことをしながら、同時に、いったん混乱した現場の雰囲気から脱し、【中二階から眺める】ことを通じて、客観的な状況分析に努め、その情報をもとに組織理念に立ち帰り、受入れ方針を固めて組織の【軸を定める】ことをしていた。

次いで、施設長は組織の受入れ体制構築に向けて、【現場を棚卸する】。また、様々な組織改善の方略によって、【援助の場を立ちあげる】ことを通じ、組織風土、組織スキル、施設環境を整備し、組織の自己効力感を高め、安定的な支援体制を構築しようとしていた。

一方で、【ぶり返す不安感と乗り越え】を体験し、さらに【組織の強みに転換する】ことを図り、【より深く地域とつながる】というプロセスを経ながら、施設長は「生活のしづらさ生きづらさに着目」して「生活主体者として捉える」ことで福祉施設がHIV陽性者を支援していく【福祉施設における主体性の回復を目指す】していた。

5. 考察

福祉施設のHIV陽性者の受け入れに関し、経営層の社会的使命感やリーダーシップが大きく関与していると推定される。また、施設長は、従事者の合意形成を重視し、特に従事者がHIVの感染不安から、組織に不安拡大と動揺が起きるとしながら、この組織内の不安の増幅を組織理念の【軸を定める】ことによって、組織不安からHIV陽性者の受け入れに向けた組織改善へ志向する組織戦略を立てることが推定された。さらに、施設長は【現場を棚卸する】や【援助の場を立ちあげる】を通じ、組織内の調整と自らの実体験を基にした様々な組織改善を行なうが、その際、組織内の合意形成に向けた組織内コミュニケーションと地域連携の活性化を図ることが示唆された。これらの施設長の戦略を社会的なサポート体制が整備されればHIV陽性者の受け入れは促進されるように思われる。

一方、一端、感染不安を克服したように見える組織も、様々なエピソードにより組織内動揺が再現されるが、これを福祉施設の専門性によって乗り越えようとする転換期があることが示唆された。HIV陽性者をHIV/AIDSという属性だけで考えていた段階から、他の利用者と同じ生活者だとする視点を獲得し、組織はHIV/AIDSに対処できるという自信を深めていくことが示唆された。福祉施設のHIV陽性者の受け入れを促進するためには、従事者にHIV/AIDSの基礎知識を習得させることも重要であるが、HIV陽性者を一人の人間としてみる実存的な理解を促進する研修のあり方を合わせて検討する必要性が示唆された。

※本研究は平成21-22年度の厚生労働科学研究費補助金事業エイズ対策研究事業「HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究」成果の一部である。

1)小西加保留(2002)『エイズとソーシャルワーク』中央法規 1-8